

風と水——無力な者の再生の物語——

齋藤英治

E・アニー・ブルーのピュリッツァー賞・全米図書賞受賞作『シッピング・ニュース』（一九九三）は、情けない中年男の奇跡のような再起を描いた物語である。主人公のクォイルは凶体こそデカいが、頭が鈍くて人を信じやすい、いわば『二十日鼠と人間』のレニーの末裔のような男で、妻のペタル・ベアに浮気されてばかりいる。性悪の妻が出奔のはてに交通事故で亡くなった後は、二人の幼い娘を抱えて途方にくれることになる。そこに現れるのが意気軒昂な叔母のアグニスで、彼女は先祖の地であるニューファンドランド島へ一緒に行くことを勧めた。そこで新聞記者として暮らしはじめた彼は、土地の人々と厳しい気候の手荒な洗礼を受けることで、じょじょに逞しい人間へと生まれ変わっていく。「アメリカ人の

人生に第二幕はない」と書いたのはスコット・フィッツジェラルドだったが、『シッピング・ニュース』は、どうしようもない中年男の奇跡の再生を描くことで、アメリカ人の人生にも幸福な第二幕がありうることを描いてみせた小説だった。

しかし、『シッピング・ニュース』の魅力は、この心温まる物語もさることながら、舞台となるカナダのニューファンドランド島の地方色にあると言っている。その過酷な自然の描写が、楽天的とも言える物語にリアリティを与えていたのだ。翻訳者の上岡伸雄氏も文庫版「訳者あとがき」で、原作の魅力について書いている。「確かにこの小説を読んでいると、ニューファンドランドという土地がまるで生きているかのように、息づいているか

のように、身近に感じられてくる。ニューファンランドの容赦のない自然、厳しい気候、漁業の不振から来る貧困、しかし希望を失わずに生き続ける人々……

さて、このカナダのニューファンランドとは、いったいどのような土地なのだろうか。映画版『シッピング・ニュース』（二〇〇一）の公式ホームページを見ると、次のような説明がなされている。「北アメリカ大陸の北東に位置する、周囲十一万二千キロメートルの三角形の島。カナダ領。起伏の激しい岩場の岬、深く入り込んだフィヨルド、無数の入り江と沖合の島々が独特の雰囲気醸し出す。気候は厳しく、首都のセントジョンズはカナダの主要都市の中で、もっとも霧がかかりやすく（百二十四日）、積雪量が多く（三百五十九センチメートル）、降雨量が多く（千五百四十四ミリメートル）、風が強く（平均風速二十四・三キロメートル）、曇りがちである（日照時間千四百九十七時間）。……また、北アメリカでもっとも嵐の多い地域でもあり、天候は変わりやすい」

どうやら、「容赦のない自然」という表現は少しも誇張ではないようだ。E・アニー・プルは、このニューファンランドの容赦のない自然を、小説のなかで雄弁に伝えてくれる。とりわけ、とつぜん吹き荒れる「風」

が印象的だ。この小説の前半には、吹きすさぶ風の印象的な描写がいくつもあり、それらがクライマックスの伏線にもなっているのだ。

「私の生まれる前のことだけどね、嵐の日にはロッキングチェアのように前後に揺れたんだって。それで女たちが気持ち悪くなったり、恐がったりしたんで、家を縛りつけて、一インチも動かないようにしたんだ。でも、この鋼索に吹き付けた風は、忘れられないような音を立てるんだよ。まったく、冬の嵐のときの音は忘れられないよ。唸るような音なんだ」（上岡伸雄訳、集英社文庫版、八十六ページ）

彼は風に向かって体を屈めた。張り裂ける空、激しい炸裂。ガソリンポンプの上にある手書きの金属板の丸看板がちぎれ、店の上を飛んで行った。男が店から出て来た。そのとき彼の手からドアがもぎ取られ、跳ね上がった。風はクオイルをポンプに叩きつけた。車の窓から叔母がひきつった顔を向けていた。そして東から突風が吹き下ろし、吹雪を彼らに浴びせかけた。（同、九十八ページ）

突風とともに強い横殴りの雨が降り、窓ガラスをガタガタ震わせ、屋根をバタバタと叩いていた。風は殴る蹴るの大暴れだった。(同、百九十六ページ)

このような見事な風の描写によって、プルーはニューファンドランドの厳しい気候を伝えてみせるのだ。しかもそれらが、主人公が再起のためにくぐり抜けねばならない苦闘の象徴にもなっているところがこの作品の秀逸なところだ。

さて、スウェーデン人監督ラッセ・ハルストレムが監督した映画『シッピング・ニュース』でも、この土地の過酷な自然を表象するものとして、風は効果的に使われている。とくに、吹き飛ばされないようにワイヤで固定した先祖の家に吹きつける強風の音や、大昔に家々人が引つ張って運んだときの吹雪の描写が印象的だ。映画と風というのは相性がいいようで、風を魅惑的に描いた映画は枚挙にいとまがないほどあるのだが、とりわけヴィクトル・シューストレム監督のMGMでのサイレント映画『風』(一九二八)は、ほとんど全編にわたって風が吹き荒れることで忘れがたい。そういえば、シュースト

レムもまたスウェーデンからアメリカにやって来た映画監督だった。シューストレムの後輩と言うべきハルストレムは、その伝統を受け継ぎ、なかなかリアリティのある風の描写を見せてくれるのである。

しかし、この映画は風の映画としては、やや物足りないうところがある。それはやはりクライマックスだろう。せっかく修復作業を続けてきた先祖の家が一夜にして嵐で壊れてしまう場面だ。ここは、プルーの小説でも、娘の一人の悪夢であるかのように幻想的に描かれている場面だ、ハルストレムも悪夢か現実かわからないように処理し、倒壊のシーンそのものを描くのは避けている。しかし、小説ではそれでいいけれど、映画のクライマックスとしては物足りなかった気がするのだ。

おそらくハルストレムは、型どおりのクライマックスを描くことで、この作品が通俗的なハリウッド映画に墮してしまふのを避けたかったのだろう。その気持ちはわからないでもない。だが、ハリウッド映画を見慣れた者としては、ここは家が吹き飛ばされるシーンを派手に演出してほしかったと思うのだ。

そうは言っても、『シッピング・ニュース』はハルストレムの良さが出た佳作であることは間違いない。それ

は一つには、彼が好んで描いてきた「無力な者の再生」というテーマを描いているからであり、またそれを風とは違ったさりげない細部を使って巧みに語っているからだろう。

ハルストレムは、彼を国際的に有名にした秀作『マイライフ・アズ・ア・ドッグ』（一九八五）ですでに、情けない人間の再生というテーマを扱っていた。主人公の少年は、都市の劣悪な環境や病弱な母親などのせいで、いつもおどおどしている男の子なのだが（オネショの癖がなかなか直らない）、母の病気のために預けられた田舎の村で、じよじよに生気を取り戻していく。村の奇妙な人々との交流が彼を変えていくのである。さらにハルストレムは、奇妙な一家の再生を描いた『ギルバート・グレイブ』（一九九三）でも、孤児の青年がリング園での体験を通して逞しくなっていく姿を描いた『サイダーハウス・ルール』（一九九九）でも、チョコレートが町の人々を変える『シヨコラ』（二〇〇〇）でも、同じような無力な人々の再生のテーマを扱ってきた気がする。この『シッピング・ニュース』でも、彼はブルーの長大な小説を手際よく映画化する一方で、魅力的な細部をあえて削るなどして、自分の好むテーマを強調してみせて

いるのである。

その再生の物語を語るために、彼がさりげなく使っているのが、水のイメージだ。映画『シッピング・ニュース』には、原作以上に、あるいは、風以上に、水のイメージが横溢している。何しろ、冒頭からして、父親に無理に泳ぎを教えられて溺れそうになる少年時代の主人公のイメージが始まるのだ。大人の彼に切り替わったときの最初の場面も外はどしゃぶりの雨であり、交通事故に遭った妻も（橋から川に落ちたという設定に変えられているので）ずぶ濡れの姿で描かれる。彼が困難に遭ったときや絶望したときには、溺れそうになった少年時代の思い出がフラッシュバックされたり、大人の彼がじっさいに水に包まれてしまうシュールなイメージが描かれたりする。水は、もっと正確に言えば、水への恐怖は、彼の無力感や忌まわしい過去を象徴するイメージなのである。彼の苦難は、ボートが転覆して海上を漂流する場面でクライマックスに達する。そしてラストで堂々とボートを走らせる彼の姿に、彼の再生が約束されている。

このように、ハルストレムは、無力な人間の再生のテーマを水のイメージを通して過不足なく描いているのだ。それはニューファンランドを象徴する強風とともに、

強い印象を見る者に与える。そういう意味では、ハルス・トレムは、風と水の助けを借りることで、『シッピング・ニュース』の映画化に成功したと言えるだろう。

プルーの小説にあった豊かなディテールが映画では中途半端にしか描かれていなかったり、設定が微妙に変えられているのが、残念と言えば残念ではある。おそらく原作に思い入れのある読者は不満を覚えることだろう（ジョン・アーヴィングの『サイダーハウス・ルール』の映画化でも、彼は思い切った変更を行っていた）。しかし、映画は時間的にも経済的にも限界の多いメディアであることを考えれば、このような変更も仕方ないかもしれない。

映画版では、二人のまったく違ったタイプの女性を演じる二人の女優が秀逸だ。ケイト・ブランシェットは、短い出演時間ながらも、魔性の妻ベタル・ベア役として派手な印象を残すし、主人公と結ばれることになるウェイヴィ役のジュリアン・ムーアは「癒し系」の女性として、地味ながら愛らしい印象を残す。主役のケヴィン・スペイシーも、『マイライフ・アズ・ア・ドッグ』の少年がそのまま大人になったかのような、頼りなげで不器用そうな中年男を好演している。